

教職員のコーナー

「風に立つライオン」

本田 栄敏

私が好きな歌のひとつにさだまさしの「風に立つライオン」という歌があります。この歌は、ケニアに青年海外協力隊員として行った人がさだまさしにあてた手紙を元に作られたものです。ケニアの隣国ザンビアに同じく青年海外協力隊員として活動していた私にとっては共感できる部分が多くあります。またその話かと思う方もいらっしゃるかも知れませんが、私の人生において大きな影響を与えた経験なのでここで少し書かせて頂きます。

赤い土で覆われた大地がどんどん近づいてき、2日がかりの日本からの旅の末、とうとうザンビアに到着しました。私にとって初めて訪れる日本以外の地、そしてその地での生活の始まりでした。1ヶ月程の首都での現地訓練を終え、いざ任地へ向かいました。私の任地は首都から1000km以上離れた田舎の学校でした。ザンビアにおいて一般的な交通機関はバスですが、そのバスというものも出発時刻など決まっておらず、一杯になったら出発するというものです。だから4、5時間待つのは当たり前、明日また来いと言われることもあります。おかげで？大分気が長くなりました。その後、やっと出発したバスに2日間揺られながら任地へ到着しました。ザンビアには協力隊員が80人ほどいましたが、私の一番近くに住んでいた日本人は100kmほど離れたところにいました。

私は理数科教師として、中学2年から高校3年生までの学校で、化学と物理を受け持つことになりました。学校が始まり、さあがんばるぞと意気込んで授業に行ったら生徒は3人、拍子抜けしながらも、子どもたちといろいろな話をしながらしばらく過ごしていました。1週間もたつころには生徒も大分増え、やっとちゃんとした授業をすることになりました。授業が始まり、やはり一番苦労したことは英語です。初めのうちは授業で話すことを一字一句ノートに書き準備しました。ギャグももちろん交えられるように頑張りました。そんな生活をしばらく続けていると私も英語が上達し、生徒も私の英語になれてきました。それ以外にもまだまだ問題はありました。机、いす、教科書、実験器具などの不足は深刻なものでありました。しかし、そんな中でも生徒達は学ぶ意欲を持ち、とても素晴らしい笑顔を持っていました。そんな子どもたちの笑顔が私自身を勇気づけ、頑張る力を与えてくれたのです。

その他に私は野球を教えていました。こちらがメインだったかもしれませんが……。私は、自分自身も野球を10年以上やっており、野球が大好きだったので、野球道具を1チーム分日本から持って行きました。ザンビアでほとんどの人はベースボールという言葉さえも聞いたことがありません。もちろん生徒達もそうで、最初はキャッチボールもまとも

にできませんでした。でも彼らは、ボールをとれたことに喜び、バットに当たったことに歓喜し、本当に野球を楽しんでいました。私が小さい頃に感じた喜びや楽しさ、野球の原点を思い出させてくれました。そんなチームでありましたが、練習を重ねるごとに、少しずつ上達していきました。しかし、我がチームには大きな問題がありました。それは、試合ができないということです。ザンビアの学校で野球をやっているチームがないのです。そこで私は日本人とアメリカ人のボランティアを集めて試合を行いました。試合は一進一退の攻防を繰り返しましたが、結局我がチームは負けてしまいました。私はいい試合ができて満足でしたが、生徒達はくやしがつてまたやろうと言っていました。

2年間のザンビアでの生活は、水道が1日に1時間しか出なかったり、1週間停電したり、マラリアにかかって死にそうになったり（おかげで大好きだった献血ができなくなりました）、隣の国の内戦の音が聞こえたり、野犬にかまれ日本人の獣医師に狂犬病の注射をしてもらったり（違法ですが）、大変だったことは書き切れません。しかし、ザンビアでの生活は私にとってとても有意義で充実したものでした。私は教師として活動していましたが、私が教えたことの何倍ものことを教えられました。日本と文化も習慣も全く違う土地で生活することにより、たくさんのことを学びました。日本のやり方が全ての地域において良いやり方だと思うのは、傲慢でしかないということ。世界中の全ての国が日本のようになる必要はなく、ザンビアはザンビアらしい国を作っていけばいいということ。お互いの“違い”を認め合ってこそお互いを理解できるのだということ。ザンビアでの経験が私にたくさんのことを考え、学ぶ機会を与えてくれました。そしてそのザンビアでの経験が私を教師への道へと導いてくれました。日本に帰国後大学に行き直し、教員免許を取りました。

私は今、韓国という国にいます。日本に近く、日本との共通点もとても多い国です。しかし、似ているからこそ違いに驚かされることも多くあります。韓国に来て、韓国語を学び、韓国人と触れ、今まで考えたこともなかったことを考えるようになりました。正直、釜山日本人学校に赴任がきまったとき、「えっ近い」と思いましたが、今では、自分自身のルーツを探しに来たような、神の見えざる手によってここに導かれてきたのだと強く感じています。ザンビアで感じたものとは違う、相似点と相違点を少しずつ感じています。

このような日本ではできないような経験ができる機会を与えていただいたことに感謝し、子どもたちと共に、韓国で生活することの大切さを感じながら、ここでの時間を価値あるものにするためにもたくさんのことを学んでいきたいと思っています。